

# デレク・ハートフィールド考

— A Wild Heartfield Chase (追つけない追究) —

平野芳信

村上春樹のデビュー作『風の歌を聴け』で、語り手が多大な影響を受けたアメリカ人作家デレク・ハートフィールドは、周知のごとく、実在の作家ではない。一応、「ロバート・E・ハワード」と「ハワード・P・ラヴクラフト」、さらには「ゾオネガット」等々の作家像を混交したものであるという定説があるが、本稿はこの定説に一石を投じるものである。すなわち、かつてアメリカ進駐軍に接収されていた明治神宮球場で、アメリカ人選手が放ったヒットの快音を耳にして、小説を書こうと思いつきながら、どうしてもうまく小説が書けなかつた春樹が、まず英語で書いてみて、それを日本語に翻訳することではじめて『風の歌を聴け』を書き上げることができたという、作者自身何度も述べ懐いているエピソードに留意した。さらには、それまでの禁を破るかのようになつた「文藝春秋」に発表されたエッセイ「猫を棄てる」において、春樹の祖父が「村上弁識」という僧侶であつたことに着目し、「弁識」氏が「ハートフィールド」氏のもうひとりのモデルであつた可能性を提案するものである。

村上春樹のデビュー作『風の歌を聴け』は「完璧な文章などといったものは存在しない。完璧な絶望が存在しないようにね。」という一文で始まる。ついでこの語り手は、「僕は文章についての多くをデレク・ハートフィールドに学んだ。」と告白する。

しかし周知のごとく、このデレク・ハートフィールドなる作家は実在していない。現在では、この架空の作家のモデルについては、畑中佳樹氏が経歴がほとんど同じだとしてロバート・E・ハワードだと断言し、久居つばき氏とくわ正人氏が、作中に架空の書籍からの引用があり読者に混乱を与えた経歴を春樹が模倣した可能性に着目し、ハワード・P・ラヴクラフトの事績も取り込んでいると指摘した<sup>③</sup>。以降、それが一応の定説となつていく観がある。もつとも、それら以前に春樹自身が「ぼくはヴォネガット好きだし、R・E・ハワードも、ラヴクラフトも好きだし、そういう好きな作家を混ぜあわせてひとつにしたものですね<sup>④</sup>。」とインタビューに答えていることを忘れてはならないだろう。そのインタビューで春樹自身が、「あとがき」で嘘書きちゃいけないって(笑)すごく問題になりまして、難しいですよね。」と述懐しているが、筆者にとつてここまで手の込んだ虚言を弄する村上春樹という作家の侮れなさは、もう一度検討に値すると思つている。

というよりも筆者は、デビュー作において、少なからざる記述量を占めるデレク・ハートフィールドという作家について、かなり以前からもう一度じっくり考えてみたいと思つていたところ、ごく最近その決定的切っ掛けを村上春樹自身が提供してくれたのである。

その切っ掛けについては後述するとして、まず、春樹が描いたハートフィールド像を今一度確認しておこう。

\*

断章「1」で、先に引用した「僕は文章についての多くをデレク・ハートフィールドに学んだ。」に続いて「殆んど全部、というべきかもしれない。」と「僕」は記す。次に、「彼は文章を武器として闘うことができる数少ない非凡な作家の1人でもあった。」として、「ヘミングウェイ、フィツジェラルド、そういつた彼の同時代の作家に伍しても、ハートフィールドのその戦闘的な姿勢は決して劣るものではないだろう、と僕は思う。」と畳みかける。結局、「1938年6月のある晴れた日曜日朝、右手にヒットラーの肖像画を抱え、左手に傘をさしたままエンパイア・ステート・ビルの上から飛び下りたのだ。」とその最期が叙述される。

中学三年生の夏休みのこと、三人いる叔父の一人が

「僕」にハートフィールドの作品の何冊かを与えという。

断章「32」には「宇宙人や化け物が登場しないという意味で」比較的シリアスで半自伝的な『虹のまわりを1周半』からその一部が引用され、「まるでレイ・ブラッドベリの出現を暗示するような短編」であった『火星の井戸』の「大まかな筋」が紹介される。

さらに、断章「40」では「最後にもう1度デレク・ハートフィールドについて語ろう。」とはじまり、彼が一九〇九年オハイオ州生まれであることが明かされ、彼の小説はそのほとんどが冒険小説と怪奇ものであり、二つの要素がうまく噛み合った最大のヒット作が『冒険児ウォールド』シリーズだったと述べられる。

最後に、彼の自殺は母の死によるものであり、墓碑銘には遺言に従って、ニーチェの言葉「昼の光に、夜の闇の深さがわかるものか。」が引用されていたと結ばれる。

群像新人文学賞受賞後、『風の歌を聴け』が「群像」の昭和五十四年（一九七九年）六月号に掲載された際は、ここまでだったが、さらに単行本では、「ハートフィールド、再び……（あとがきにかえて）」が付加される。

ここでは、『風の歌を聴け』の物語内現在から数年後、「僕」がハートフィールドの墓参りのためだけに、アメリカに渡ったことが語られる。そして、「この小説はそうい

った場所から始まった。そして何処に辿り着いたのかは僕にもわからない。」と記される。そして、念の入ったことに、次のように締めくくられる。

最後になってしまったが、ハートフィールドの記事に関しては前述したマックリユア氏の労作、「不妊の星々の伝説」(Thomas McClure: The Legend of the Sterile Stars: 1968) から幾つか引用させていただいた。感謝する。

一九七九年五月

村上春樹<sup>⑤</sup>

これが先述した「あとがき」で嘘ついちゃいけない云々の箇所だと思われるが、まず、留意するべき点は「一九七九年五月」という日付である。『風の歌を聴け』が第二十二回群像新人文学賞当選作として「群像」に掲載されたのは、先に述べたように、昭和五十四年つまり一九七九年の六月号である。日本の出版事情から推して、五月にはすでに書店にならんでいるので、それに対応して五月なのだろうが、一方で疑問も残らないではない。

なぜなら、初版の単行本の発行年月日が一九七九年七月二十五日となっているからなのだ。つまり、雑誌「群像」誌上では存在しなかった「ハートフィールド、再び……

(あとがきにかえて)」を書き加えたのは動かしがたい事実なのであるから、単行本の「あとがき」の最後は一九七九年六月でも、あるいは七月でもなんら問題がないはずなのだ。

これはいかなる事情によるものだろうか。

その可能性の一つを提示しておこう。新人賞発表の翌月つまり昭和五十四年七月号の「群像」に上田三四二、三木卓、菅野昭正による「第四十三回創作合評」が掲載されている。ここで『風の歌を聴け』が狙上にのせられている。

上田 書くことが人生だ、ということが、ハートフィールドという人の言葉として、最初に出てきますね。ぼくはハートフィールドって知らないんですけど……。

三木 実在するんでしょかね。

上田 そういうこと。もしこれが実在してなければ非常にいいと思うな、これも創作であればね。

(略)

菅野 幾つか翻訳があると書いてありますね。でも、こういう翻訳はぼくは見たことがないから架空の作家だと思いましたね。

上田 エンパイア・ステート・ビルからヒットラーの

肖像を抱えて飛び降りた(八ページ)というの  
も、あまりにもうまくできていますし。

菅野

ぼくも本当のところは知らないけれども、架空だと断言してもし本場にいたらぐあい悪いなあ。

(笑)

三木

エドガー・ライス・バローズとかブラッドベリとかを合成してやっている感じがちよつとするんで、知らないんですけど、大分疑ったんですけど、ぼくはアメリカのことは非常に弱いので、また話は古いけれども、もしこれが芥川龍之介の「れげんだ・おうれあ」みたいな全く架空のものであつて——合成でもいいんですけども、よせ集めた一つの人物をつくっているんであれば、この作者はなかなかしたたかで、われわれは乗せられて、実在だと思えますし、よくできていますし、その架空の人の架空の文章を引つ張ってくるなんてことは、大変なものだと思うのですね。だから、ぼくはうそであつてほしい。

上田

仮に実在であつても、使い方が非常にうまいですね。もし架空の作家だとしたら、いまおっしゃったように、本当にしたたかなエピソードのつくり方ですね。<sup>6</sup>

菅野

仮に実在であつても、使い方が非常にうまいですね。もし架空の作家だとしたら、いまおっしゃったように、本当にしたたかなエピソードのつくり方ですね。<sup>6</sup>

上田三四二氏の「エンパイア・ステート・ビルからヒッ  
トラーの肖像を抱えて飛び降りた(八ページ)」（傍点引用  
者）」という発言において、「八ページ」と明記してあると  
ころから見て、彼らは「群像」六月号を読んでいる可能性  
が高い(ちなみに、単行本の初版における当該箇所と思わ  
れるのは六ページである)。にもかかわらずというべきか、  
だからこそというべきか、春樹はこの創作合評会に呼応し  
て、いわばダメ押しをするために「あとがきにかえて」を、  
敢えて加筆しているふしがあるのだ。そうすると「あとが  
きで嘘ついちやいけない」云々の件が、より一層鮮明にな  
ってくるように思える。

\*

このような、村上春樹のデビュー当時からの「強かさ」  
あるいは「侮れなさ」に関して、丸谷才一が群像新人文学  
賞贈呈式における受賞の挨拶について、次のようにコメン  
トしている。

この会のとときの村上春樹さんの受賞の挨拶が、とて  
も気がきいていた。

彼はロス・マクドナルドの探偵小説が大好きで、そ  
の名探偵リュウ・アーチャーのファンなので、将来小

説家になつたら、ぜひ村上龍といふ筆名で書かうと思  
つてゐた。ところが先に村上龍氏が小説家として登場  
してしまつたので、村上春樹でゆくしかなくなつて非  
常に残念だ、といふ話だつた。

受賞の挨拶でこのくらゐ人を喰つた話ができる新人  
は、警戒すべきである。<sup>(7)</sup>

この証言をどう考えるかということだが、一方で春樹は  
インタビュー「私の文学を語る」の中で、川本三郎に対し  
て「で、ぼくは、リュウ・アーチャーが好きだつたから、  
昔から何かを書くことがあつたら、ペンネームは絶対村上  
リュウにしようと思つてたんですよ(笑)。みんな冗談だ  
と思つてるけど、本当なんですよ。」<sup>(8)</sup>と同前のことを述べ  
ている。これをしたたかなダメ押しとみるか、素直すぎる  
意思表示と受け取るかによって、疑心を招くのかさうでは  
ないのか判断が分かれるように思われる。

このエピソードとともに思い出すのは、春樹がこんなこ  
とを証言していたことである。

ある長編小説を書いていたことですが、僕は  
原稿の段階で、あまり「合わない」編集者から指摘が  
あつた箇所をすべて書き直しました。ただし大半は、

その人の助言とは真逆の方向に書き直しました。たとえば「ここは長くした方がいい」と言われた部分は短くし、「ここは短くした方がいい」と言われた部分は長くしたわけです。今から思えばかなり乱暴な話なんです<sup>(9)</sup>が、それでもその書き直しは結果的にうまくいきました<sup>(9)</sup>。

もちろん、このエピソードは「大事なものは、書き直すという行為そのもの（傍点原文）」なのだという春樹の主張を印象づけるための極端な事例だったのだろうが、一方ではある時期までの日本における春樹と編集者の関係を象徴しているように思えるのである<sup>(10)</sup>。

ところが、興味深いことに、春樹は外国ではいわば正反對の対応をしていたことが、近年徐々に明らかになってきつつあるのだ。

辛島デイビッド氏の『Hauki Murakami』を読んでいるときに我々が読んでいる者たち<sup>(11)</sup>は、村上春樹が欧米圏でどのように受容され、現在の地位を得るに到ったかという経緯を春樹をはじめとする諸氏へのインタビューを中心に、見事にあぶり出した労作だが、その中で次のような考察を示している。

例えば、村上春樹の英語圏での評価が定まる前の一九九〇年代後半までにバーンbaumとルービンが訳した作品を客観的に見ると、どちらも（様々な事情があり）一般的な「翻訳」作業を超えた「編集」や「翻案」作業を要したものが多<sup>(12)</sup>い。（略）

村上も翻訳家が必要と考えた「改変」については大らかな方で、基本的には、訳者を信頼し、できるだけまかせるとい<sup>(13)</sup>うスタンスを——この方針も英語圏での読者が広がるにつれて徐々に変わることになるが——少なくとも英訳が始めてからの十年強はとっていた。そして、この柔軟なスタンスは、のちに英語圏で（村上の言葉を借りると）「最高のポジション」を得る上でとても重要になる<sup>(14)</sup>。

私見を交えていうなら、村上春樹という作家は閉鎖的で湿潤的な日本を飛び出し、主としてアメリカで自身の作品の翻訳をいわば戦略的にマネージメントすることによって一定の評価を得、それによって（誤解を恐れず言うなら、一種の外圧を利用することによって）、日本国内での出版業界に受け入れられる（和解といってもいい）ことに成功したのではな<sup>(15)</sup>かろうか。

\*

アメリカ文学との関わりでいうなら、もう一度、畑中佳樹氏の指摘を思い出すことも必要だろう。畑中氏は次のように強調する。

アメリカ文学と村上春樹の関係は単純である。アメリカ文学、というかアメリカ小説を読むのが大好きな男が、ある日たまたま小説を書き始めた。それだけだ。この簡単で力強い事実を、ぼくらはたとえば、村上春樹はアメリカ文学の影響下で小説を書き始めた、などという常套句と決して混同しないように注意しよう。

すでに、春樹自身何度かその経緯を文章にしているが、最近になって、「小説家になった頃」というエッセイで、再びあたかも確認するかのように書き残している。それによれば、一九七八年の四月のよく晴れた日の午後、ヤクルト・スワローズ対広島カープの試合が神宮球場で行われ、それを見に行っていた春樹はヤクルトの先頭バッター、デイク・ヒルトンが二塁打を放った瞬間、小説を書けるような気がして、原稿用紙と万年筆を買って求めた。

春樹が文壇デビューを果たすまでの、この有名なエピソード

を語ったエッセイを一つ一つ時系列に沿ってならべて比較検討してみたわけではないので、あくまでも印象でしかないのだが、あとになるほど具体的に述べられているように、少なくとも筆者には感じられる。

それ以上に興味深いのは、アメリカ文学に親しんでいた一人の青年がかつてアメリカ進駐軍に接収されていた明治神宮球場で、アメリカ人選手が放ったヒットの快音を耳にして、小説を書こうと思いついたということなのである。しかも、一番新しい回想では、その啓示のごとき出来事を、英語のエピファニー (epiphany) と言い換えているのである。

おまけに、その後、どうしてもうまく小説が書けないので、「押し入れにしまっていたオリベツティの英文タイプライターを持ち出し、(傍点引用者) まず英語で書いてみて、それを日本語に翻訳することで、『風の歌を聴け』を完成することができたというのだ。

この一連の展開をあたかも敷衍するかのように、佐々木敦氏は次のように評した。

いふなれば村上春樹は、日本語で書く英語作家であり、海の向こうでは英語で読まれる日本語作家です。

(中略) 彼は小説家になるために自分の書いた英語を



日本語に「翻訳」しなければなりませんでしたが、そうして書かれた日本語を再び英語に「翻訳」したものを、日本語を解さない世界の多くの読者が「村上春樹の文学」として読んでいることになりました（つまりこれは日本における海外文学の扱いと同じです）。（傍点原文）

春樹が作家になるために採用したこの図式というか、システムが妥当なものであるとしたら、もう一つ別のある可能性を筆者は感じる。つまり、デビュー作『風の歌を聴け』で架空のアメリカ人作家デレク・ハートフィールドを捏造したシステムにも、その根底には同じものがあつたのではないかということなのである。

\*

村上春樹がそれまでの禁をやぶるかのように、身内についての数々の情報をさらけ出した（としか思えぬ）エッセイ「猫を棄てる」は、筆者のような村上春樹研究の末席に連なる者にとつても、何か一言でも反応せねばならぬと思わせる記述に満ちあふれている。

それにしても、いったい何から手をつけてたらよいものか？ それほどの膨大な情報開示量なのである。まず、こ

のエッセイは「父親について語るときに僕の語ること」というサブタイトルがつけられている。分量的にも、春樹の父千秋氏の事績と春樹自身との関わりにまつわる内容が半分以上を占めている。

ただし、事績に関しては、新旧含めた情報である。旧聞に属するものとしては、千秋氏が毎朝、朝食前に仏壇に向かって長時間お経を唱えることや、それが前の戦争で死んでいった人たちのためであるという挿話。また、兵役で、中国大陸で従軍中、捕虜を惨殺させられた経験息子春樹に語り、そのトラウマが春樹に継承された等々といった具合である。

新しい情報については、まず千秋氏の学業を簡単にまとめておこう。

父、村上千秋氏は京都市左京区粟田口にある浄土宗「安養寺」の次男として、大正六年（一九一七年）十二月一日に生を受け、昭和十一年（一九三六年）に旧制東山中学校を卒業し、十八歳で現在の京都府長岡京市粟生にあわおあつた西山専門さん学校に進学した。その後、卒業まで徴兵猶予されるはずが、事務上の手違いで、学業途中の昭和十三年（一九三八年）八月に徴兵された。中国大陸で輜重しゅうじゅうの役に従事し、一年後兵役を終え、西山専門学校に復学し、昭和十六年（一九四一年）三月に卒業している。同年九月臨時召集を



受け十月に再度兵役に就くが、十一月三十日に突如召集解除になる。昭和十九年（一九四四年）十月京都帝国大学文学部文学科に進学し、昭和二十二年（一九四七）九月に卒業し、引き続き大学院に進学している。

おそらくは、千秋氏逝去後、春樹は父親の事績を少しずつ調べていたのだろう。繰り返しになるが、なぜ、これほど多くの情報開示に踏み切ったのであろうか。研究の名の下に、自身や身内に関する様々な事柄が公になる前に、自ら先手を打ったとでもいうのであろうか。一つの可能性として、今後の春樹研究は今回の父親に関する思い切った情報開示によって、今度は母上に注がれることになるだろうと推測される。

これに逆らうわけではないのだが、予てより筆者の関心は春樹の祖父にあったのだ。その端緒は、芳川泰久氏による次のような一文に接したからなのだ。

こうした彼「引用者注―春樹」の集中力は、父方の祖父ゆずりで、この祖父は、京都の寺の僧侶だった。

その熱をおびた晴朗さは、いつまでも作家の心に刻まれている。この人物には、しかしたった一つだけ欠点があった。酒好きだったのだ。ある晩、酔って、彼の祖父は線路の上に横向きに寝てしまった。その上を路

面電車が通った。祖父はふたつに切断されて死んだ。ハルキ・ムラカミの主人公たちがいつもその片割れを探しているのは、そのためだろうか。<sup>16)</sup>

これはフランスのテレビ情報誌「テレラマ」に掲載された春樹に対するインタビュー記事の内容を紹介したものであった。

ちなみに、筆者の勤務校の同僚であるミッシェル・デュボアッシュ氏が先の「テレラマ」の記事がインターネット上に公開されていることを発見し、日本語に訳してくださった。先の芳川氏の引用元と思われる箇所とデュボアッシュ氏による日本語訳を示しておく。

Cet art de la concentration lui vient de son grand-père paternel, prêtre bouddhiste dans un temple de Kyôto, dont la sérénité fervente l'a marqué à jamais. L'homme n'avait qu'un défaut : l'amour du saké. Une nuit d'ivresse, il s'est couché sur les rails de la voie ferrée. Le tramway lui a roulé dessus. Il est mort coupé en deux. Est-ce pour cela que les héros de Murakami cherchent toujours leur moitié ?<sup>17)</sup>

村上 は集中する術をおじいさんから受け継いだ。おじいさんは京都の寺の僧侶だった。彼の熱心な平静は村上に深い刻印を残した。一つの欠点しかなかった。つまり、お酒が大好きだった。飲み過ぎたある晩、線路のレールの上に横たわった。路面電車にひかれた。二つに切り分けられて死んだ。村上の登場人物たちが常に自分の半分を探すのは、そのためだろうか。

実は平成が残り一月余りとなった三十年三月末の数日間、筆者は京都にいた。それは、春樹の祖父の死亡記事を探し出すためであった。いや、誤解を招くことを避けるために、より正確に記しておこう。祖父の名前を確認するために記事を探したかったのであって、決して死因が知りたかったわけではない。

上記の記述から推して、春樹には祖父の記憶があると思われた。それゆえ、筆者は春樹が昭和二十四年（一九四九年）生まれであることを考慮し、記憶が定着する時期が生後四、五歳以降であると考え、昭和三十年（一九五五年）前後の京都新聞を調査の対象とし、京都に赴いたのである。しかし、結果は不首尾におわってしまった。

ところが、それから、二月も経たぬ間に、春樹が祖父の名が「村上弁識<sup>べんしき</sup>」であることを開示してくれたのである。

まさに冒頭で述べた切っ掛けを村上春樹本人が提供してくれたのだった。

いささか長くなるが、村上弁識氏に関する情報をまとめ引用しておく。

僕の祖父にあたる村上弁識<sup>べんしき</sup>はもともとは愛知県の農家の息子だったのだが、長男以外の男の子のひとつの身の振り方として、近くの寺に修行僧として出された。

（略）やがて京都の安養寺に住職として迎えられることになった。（略）

どうやらかなり自由闊達なタイプの人物であり、豪快に酒を飲み、また酔っ払うことで名を馳せていたようだ。名前の通り弁も立ち、僧侶としてはそれなりに有能な人であり、人望もあつたらしい。僕の覚えている限りでは、一見して豪放磊落、一種カリスマ的な要素を持ち合わせていた。大きなよくとおる声で話していたことを記憶している。

彼は六人の息子をもうけ（女子は一人もいなかった）、元氣よく人生を生きてきたが、1958年8月25日の朝、8時50分頃に京都（御陵<sup>みくら</sup>）と大津を結ぶ京津線の山田踏切りを横断しようとして、電車にはねられて死んだ。東山区山科北花山山田町（当時の住所）

にある警手のいない踏切りだった。ちょうど大きな台風が近畿地方を襲った日で（その日、東海道線も一部不通になった）、激しい雨が降っていて、祖父は傘を差しており、カーブを曲がってやってくる電車の姿が見えなかったのだろう。耳も少し悪かったようだ。僕はなぜか祖父が死んだのは台風の中で、檀家を訪れた帰り道でたぶん少し酒も入っていたというように記憶していたのだが、当時の新聞記事を調べてみると、話はまったく違っている。<sup>18</sup>

筆者が、久しく知りたいたいと思っていた人物の名が、突然判明したときの驚きは、一種名状しがたいものがある。それは、予想どおり、いやそれ以上だったからに他ならない。おそらく、読者の多くは「べんしき」から、まず最新長篇『騎士団長殺し』の免色めんしきを連想されるかもしれない。それはそれで正解なのだと思う。しかし、旋毛曲りの筆者は、村上春樹ともあろう手練が、そんな単純な種明かしをするのだろうかとおぼろげになってしまうのだ。おそらく、数年後に発表するエッセイで、明らかにする予定であった祖父の名と長篇小説の主要登場人物名と、ある種の関連があるかのよような誘導することは（あるいはそうとしかみえぬことをするのには）、彼一流のレトリック（あるいは、トラップ）

なのだろう。だとするならば、どう考えるか、なのだ。

先述した「こうした彼の集中力は、父方の祖父ゆずりでのこの祖父は、京都の寺の僧侶だった。その熱をおびた晴朗さは、いつまでも作家の心に刻まれている。」という一文に接して以来、筆者はある思いに取り憑かれている。それは当初、単なる思いつきに過ぎなかったが、次第にある種の確信に変化してしまった。しかし、それを証明するものは何もなかった。だからこそ、春樹の証言を頼りにして、なんとか祖父の名を知りたかったのだ。

結論からいっておこう。春樹のデビュー作『風の歌を聴け』において、彼はデレク・ハートフィールドなる架空のアメリカ人作家を捏造したが、そのモデルは祖父「弁識」氏だったのではないだろうか？ なぜなら、決定的であるのは「弁識」の「識」は、たとえば日本国語大辞典第五巻の「①物事を見分ける。知る。さとる。／意識、知識（略）②仏教で五蘊の一つ。認識する心の作用。／意識（略）③かんがえ。いけん。／識達（略）④知り合い。／相識（略）⑤しるし。しるす。／標識<sup>19</sup>」等々の記述を逐一引用するまでもなく、「心」ないしは「心の動き、あるいはそれに伴う作用全般」を現すという意味であり、つまり「ハート」だからなのだ。それだけで十分かと思われる。あるいは孫の目には文字どおり「弁が立つ」風に見えた祖

父の姿は、ハートフィールドの「文章を武器として闘うことができる」作家として描かれたのかもしれない。

傍証は他にも指摘できる。いくつかの人名辞典で確認したが、そもそも「ハートフィールド」という人名は英語圏では存在しない。それは「Herfield」とも「Hartfield」でも事情は同じである。とするなら、「ハートフィールド」という名は、英語由来ではない可能性を示すものではないだろうか。

さらには、弁識氏は一九五八年八月二十五日に亡くなっているが、そのとき七十歳だった。すると生年は一八八八年ということになる。思い出してほしい、デビュー作『風の歌を聴け』が「1970年の8月8日に始まり、18日後、つまり同じ年の8月26日に終る。」(「2」)と記されていることを。かつて、加藤典洋氏がこの物語が開幕直後にこのように明言されながら、実際は十八日間に収まり切らぬと主張したが、春樹にとつて重要だったのは、「1970年の8月8日に始まり、18日後、つまり同じ年の8月26日に終る。(傍点引用者)」という宣言は、その中身ではなくて数字の方にあつたのだ。それはまるで、語り手の「僕」が人間の存在理由をテーマにした短い小説を書くこととした結果、一九六九年八月十五日から翌年の四月三日までの間に、三五八回の講義に出席し、五十四回のセック

スを行い、六九二一本の煙草を吸ったことを記録していた姿をも彷彿とさせはしまいか？

春樹の祖父であつた弁識氏の命日が八月二十五日であり、それが『ノルウェイの森』の直子の命日と重複しているのは、(いや、作品を詳細に読めば、直子の本当の命日はおそらく日付が二十六日になつてからだろうが)、一方で長年抱き続けていた筆者のもう一つの疑問を氷解させた。念のためにいっておくが、今ここで重要なのは、直子という名の方なのである。

今回の「猫を棄てる」において春樹のご両親のうち、副題に明示されているように、あきらかに父親への情報過多・偏重が目につく。それはこれまでも同然で、春樹の筆や言が母親に及ぶことはほとんどいいほどなかった。今回もこれまで以上に踏み込んだとはいえ、母親への思いは不自然なまでに隠蔽されている。いや、無関心だといふべきかもしれない。

考えてみれば、日本近代文学において男性作家たちの多くは母性思慕を描いてきた。鏡花然り、谷崎然りである。しかし、ほとんど例外的に志賀直哉だけが(必ずしも「だけ」とは断言できないが)、父との不和を生涯のテーマとして取り上げていたように思われる。

だからこそ、村上春樹がデビュー作『風の歌を聴け』か

ら描き、その後、間断なく『1973年のピンボール』

『羊をめぐる冒険』、『螢』とその発展形である『ノルウェイの森』において、いわばその死を重ねていく存在は「直子」でなければならなかったのだ。

なぜなら、志賀直哉の代表作にして、唯一の長篇『暗夜行路』の主人公時任謙作の妻の名は、他ならぬ「直子」だったからである。

と、ここまで書いてきて、あるいはこれもまた村上春樹という作家がわれわれに仕掛けた陥穽<sup>トラップ</sup>ではないかという気がしてきた。

なぜなら、エッセイの体裁をとっている「猫を棄てる」が、果たして純粋にエッセイなのかという素朴な疑義があるからである。それはたとえば、ごく最近「文学界」に発表された短篇小説『ヤクルト・スワローズ詩集』において、語り手「僕」がはじめて「村上春樹」とフルネームで自身を名乗り、「僕は京都生まれだが、生まれてまもなく阪神間に移り、十八歳になるまでそこで暮らした。」といった具合に、ほとんど生身の自身をさらけ出したかのように語る様を目の当たりにするにつけ、その印象は強まりこそすれ、弱まることはないのだ。

\*

「猫を棄てる」はまず、春樹が父千秋氏と共に夙川から約二キロ離れた香櫨園の浜に猫を遺棄するためにでかけ、まっすぐ自転車で自宅に戻ったところ、捨ててきたはずの猫が先回りして玄関先で、春樹と父を出迎え、結局その猫を飼いつけたというエピソードではじまる。

この額縁<sup>額縁</sup>的挿話は「親に「捨てられる」というパートで、春樹の従兄弟にあたる人物から聞かされた千秋氏の幼少期における秘密と呼応関係にあつて、それゆえに玄関で捨ててきたはずの猫と再会した際に千秋氏がまず杳然とし、やがて感心した表情になり、最終的にホッとしたような顔をしたことを春樹が思い出すというある種のオチにつながっていることはいうまでもない。

それはそれで春樹の手腕を感じさせるのだが、気になるのは途中に挿入された「どうしてそんな大きな猫を棄てに行ったりしたのか、よく覚えていない。我々が住んでいたのは庭のある一軒家だったし、猫を飼うくらいスペースはじゅうぶんあったからだ。」という箇所と「僕は兄弟を持たなかったので、猫と本が僕のいちばん大事な仲間だった。縁側で（その時代の家にはたいてい縁側がついていた）猫と一緒にひなたぼっこをするのが大好きだった。な

のにどうしてその猫を海岸に棄てに行かなくてはならなかったのだろうか？ なぜ僕はそのことに対して異議を唱えなかったのだろうか？ それは——猫が僕らより早く帰宅していたことと並んで——今でも僕にとつての大きな謎になっている。」という部分なのである。そこには、捨ててく、い、い、を指示したのが誰で、だからこそ、春樹は拒否できなかったのだということが、いわば如実に語られてはいないだろうか。

そう思うのは、「祖父の死と六人の兄弟」のパートで、祖父の死を知らされた千秋氏にむかつて、「京都のお寺を継ぐことだけは、きちんと断ってくださいね」と懇願する母の姿を「僕はそのときまだ九歳だったが、その情景は脳裏にまだはつきり焼き付いている。」といわばネガとポジのように対象的に描き分けられていることにあきらかではないだろうか。

もう一点、どうしても指摘しておきたいことがある。それは「もうひとつ子供時代の、猫にまつわる思い出がある」とはじめられる、一見冒頭の挿話と対をなすかのよう  
に書かれた「松の木を上つていった猫」のパートである。  
村上家で飼っていた白い猫がある夕方春樹の目の前で松の木に登り、降りられなくなってしまう、ついには行方がわからなくなつたという内容で、「降りることは、上がるこ

とよりもずっとむずかしい」という教訓を春樹に残したという。

初読の際、筆者はこの白猫のエピソードは子をなさなかつた春樹の悔恨とでもいうべきもので、父千秋氏の挿話を受けているかのようにも読んだ。が、それ以上にこのパートは無くてもよい。いや、無いほうが圧倒的に収まりがよいように思えた。なぜなら、子孫を残さぬある種の悔恨はその前に置かれた「自分自身が透明になる感覚」パートにおいて、ある意味ではすでに提出済の命題だからである。

だとしたら、これはいかなることなのであろうか。何度か読み直しているうちに、これは作家としてノーベル文学賞に最も近い日本人作家といわれるまでの高評価を得るに到つた春樹の、半ば正直な現在の心境吐露とも考えるようになった。

しかし、現段階における、筆者の解釈はこうである。さきほど引用した「もうひとつ子供時代の、猫にまつわる思い出がある」の後「これは前にどこかの小説の中に、エピソードとして書いた記憶があるのだが、もう一度書く。今度は一いつの事実として。」と引き取られたとき、春樹はまさに語るに落ちたのではないだろうか。ここで「どこかの小説」といえば、たとえばある読者は「スプートニクの恋人」の中にあつたなと思いつくかもしれない。しかしそ



これは、春樹一流のフエイクなかもしれない。なぜなら、鈴木和成氏によれば、この本に登りその後行方不明になった猫のエピソードは『スプートニクの恋人』以前に『人食い猫』という短篇、ならびに『すばらしいアレキサンダー』と、空飛び猫たち』の「訳注」でも使われているというのである。かつて一度フィクションの中で描いた消えた猫のエピソードを、今度は事実としてもう一度使うと宣言したとき、いわばこの猫は特殊な仕掛けと化したのだ。

春樹作品では、しばしば指摘されるある種の場面の使い回しが批判されるが、少なくとも、筆者はそれは存外的外れではないかと考えている。この問題は別稿をもって詳述したいが、とりあえずは次のように考えている。たとえば、女性と猫が似ているというような言い方がある。もしそうなら、春樹の作品の始まりで、しばしば妻や恋人が失踪したり、別れ話を持ち出されたりする一連の導入シークエンスというものと猫の消失譚はその反復において、春樹文学の本質に関わる何かの表象なのだと思う。それゆえに、妻や恋人の失踪譚は単なる使い回しではなく、より決定的に重要なモチーフであったゆえに、何度でも反復しなければならぬ事象の謂なのだと推察される。

しかしながら、そうすると最後におかれた「消えた猫」は実は「棄てられた猫」の変奏なのでないのか、つまり、

何度棄ててもその都度舞い戻ってくるナニモノかの謂だったようにも思えるのだ。

\*

おそらく、京都の東山界隈は春樹にとって、心のふるさとだったのではあるまいか。それだけは、どうやら動かしようのない事実らしい。

#### 注

(一) いうまでもなく「A Wild Heartfield Chase」というサブタイトルは、「A Wild sheep Chase (羊をめぐる冒険)」の振りであり、そもそもこのタイトルそのものが、「当てのない追及」という意味の慣用句「a wild goose chase」を踏まえたネーミングだったことを、辛島ダイヴィッド氏の著書(『Hantki Murakami を読んでいるときに我々が読んでいる者たち』H 29 < 18 >・9 みすず書房 83頁)によって知り得たからである。なお、ハートフィールドの綴りについては、アルフレッド・バーンバウム訳「HEAR THE WIND SING」(S 62 < 87 >・2 講談社インターナショナル)においては「Heartfield」であり、テッド・グーセン訳の「HEAR THE WIND SING」(2015 Penguin Random House UK)では「Hartfield」となっている。あくまでも想像の域を出ないが、「Heartfield」はタイトルの「HEAR THE WIND SING」のうち、最初の五文字を振った訳者のセンスを感じさせ、「Hartfield」は元タイギリスの出版社で



あるペンギン・ランダムハウス・UKからの刊行だということとを考慮するとA・A・ミルンが「クマのプーさん」シリーズを生み出したコッチフォード・ファームの所在地ハートフィールド (Hatfield) に由来しているのかもしれない。本稿では論旨の関係上、前者を採用した。

(2) 畑中佳樹「アメリカ文学と村上春樹——または、春樹とアメリカン・バルブの香り」「國文學」第30巻第3号 S 60  
〈85〉・3 学燈社

(3) 久居つばき氏・くわ正人「「ハートフィールド」を求めて」『象が平原に還った日——キーワードで読む村上春樹』H 4  
〈92〉・1 新潮社

(4) 村上春樹「【一書一会】ブック・インタビュー」村上春樹「羊をめぐる冒険 ぼくらのモダン・ファンタジー」『幻想文学』第3号 S 58 〈83〉・4 幻想文学会出版局 9頁

(5) 村上春樹『風の歌を聴け』S 54 〈79〉・7 講談社 201頁  
ちなみに、この部分は文庫本では、そのまま踏襲され掲載されているが、『村上春樹全作品1979〜1989 第1巻 風の歌を聴け・1973年のピンボール』(H 2 〈90〉・5 講談社) では、削除されている。

(6) 上田三四二、三木卓、菅野昭正「第四十三回 創作合評」『群像』第34巻第7号 S 54 〈79〉・7 講談社 339頁

(7) 丸谷才一「五月の風のやうな」『挨拶はむづかしい』S 63  
〈88〉・6 朝日新聞社 98頁

(8) 村上春樹「私の文学を語る 村上春樹(聞き手)川本三郎」「カイエ」第2巻第8号 S 54 〈79〉・8 冬樹社 210頁

(9) 村上春樹「時間を味方につける——長編小説を書くこと」

『職業としての小説家』H 27 〈15〉・9 スイッチ・パブリッシング 151頁

(10) 村上春樹自身、なぜ海外に出たのかという質問に対して「当時はね、作家と批評家と編集者がサークルみたいなものを組んで、機能するような時代だったんですよ。だからどつかのサークルに属して、ポジションを持っていないと、もう今じゃわからないだろうけど、けっこうな切迫感というか、孤立感みたいなものを感じざるを得ないところがあった。ぼくは反文壇というわけじゃなかった、人とはほとんど付き合ひそうという付き合いが好きじゃなくて、人とはほとんど付き合ひなかった。そうすると、その頃の文壇的な世界には、

「友だちじゃなければ敵」っていうようなところがあって、ぼくみたいに「味方も求めず、敵も求めず」という原則でやっていると、まわりにほとんど敵しかできないという状況になってくるんですね。あまり気にしないようにはしてたけど、場合によっては結構きつかったですね。ぼくとしてはただ「個人業」として、一人でこつこつ仕事をしていただけなんですけど、なぜか目立つようなことになってしまってます。(村上春樹「成長」を指して、成しつづけて——村上春樹インタビュー(聞き手・古川日出男)、『モンキービジネス』2009 Spring vol.3 対話号 H 21 〈09〉・5 ヴィレッジブックス 11〜12頁)と証言している。

(11) 辛島ダイヴィッド「バーンバウム、村上春樹を発見する 1984-1986」前掲(1)に同じ 41〜42頁

(12) 畑中佳樹 前掲(2)に同じ 126頁

(13) 村上春樹 前掲(9)に同じ

(14) 佐々木敦「英語」から遠く離れて」『ニッポンの文学』講

談社 H 28〈16〉・2 110〜111頁

(15) 石原千秋氏は【文芸時評】6月号 村上春樹の静かな応

答』 (<https://www.sankei.com/life/news/190526/lif1905260032-n1.html> : 最終閲覧2019/5/26) ㊦『ねじま

き鳥クロニクル』において、質問を肯定するときに「僕」がうなづく場面に着目し、「高校生時代からアメリカ文学を英語で読んでいた村上春樹は、どうやら英語(一)で小説を書いているようなのだ。」と指摘している。要するに、日本では質問した相手に応答するが、アルファベットの国では、質問の内容に応答するというわけなのである。

(16) 芳川泰久「歴史の出現と井戸マジック―ねじまき鳥クロニクル」詳論『村上春樹とハルキムラカミ―精神分析する作家―』H 22〈10〉・4 ミネルヴァ書房 87頁

(17) Marine Landrot, L'ami Murakami, Télérama (19 / 7 / 2006) ([https://www.terrama.fr/livre/15861-ami\\_murakami.php](https://www.terrama.fr/livre/15861-ami_murakami.php) 最終閲覧2019/6/9)

(18) 村上春樹「猫を棄てる―父親について語るときに僕の語ること」『文藝春秋』第97巻第6号 R 1〈19〉・6 文藝春秋 24〜25頁

ちなみに、「京都新聞」昭和三十三年(一九五八年)八月二十五日付「夕刊」には「老人、京津急行にはねられ即死」の見出しで、以下のような記事が掲載されている。

二十五日朝八時五十分ごろ、京都市東山区山科北花山山田町、京津線山田踏切りを横断しようとした左京区粟田口山下町、安養寺住職村上弁藏さん(七〇)は、三条発石山行急行電車⇨田辺常夫運転士(三三)⇨にはねられ

即死した。無警手の踏切りで、雨のためカサをさして電車に気づかなかつたもの。

(19) 『日本国語大辞典【縮刷版】』第5巻 S 55〈80〉・6 小学館 415頁

(20) 今回確認した辞典は、岩波書店編集部編『岩波西洋人名辞典』(S 31〈56〉・10 岩波書店、デイヴィッド・クリスタル編『日本語版編集主幹・金子雄司・富山太佳夫・岩波ケンブリッジ 世界人名辞典』(H 9〈97〉・11 岩波書店、岩波書店辞典編集部編『岩波 世界人名大辞典 第2分冊』(H 25〈13〉・12 岩波書店)の三冊である。

(21) 加藤典洋「夏の十九日間―『風の歌を聴け』の読解」『國文學』第40巻第4号 H 7〈95〉・3 学燈社 なお、同氏は『村上春樹 イエローページ』(H 8〈96〉・10 荒地出版社)の第一章でも、同様の論陣を張っている。

(22) 村上春樹『ヤクルト・スワローズ詩集』『文藝春秋』第73巻第8号 R 1〈19〉・8 47頁

(23) 鈴木和成『「スプラウト」の恋人』、あるいは猫とすみれのフーガ』『村上春樹は電気猫の夢を見るか? ムラカミ猫アソロジー』H 27〈15〉・1 彩流社

付記 本稿における『風の歌を聴け』の引用は、断らぬかぎり初出(「群像」第34巻第6号 S 54〈79〉・6 講談社)に依った。

最後になったが、本稿執筆に際して、「テレマ」に関して山口大学文学部の同僚ミッシェル・ドゥボアッシュ先生から、「ハートフィールド」の綴り等々に関しては、同じく同僚の外山健二先生から、それぞれ貴重な助言を賜った。記して感謝する次第である。